
A collection of short stories

るうあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A c c o l l e c t i o n o f s h o r t s t o r i e s

【Nコード】

N 1 2 7 1 Z

【作者名】

るつあ

【あらすじ】

こちらの短編小説は創作企画【みんなで100題】に投稿したものです。各一話ごとの読み切りですが、中には連作となっているものもあります。平凡な日常の恋物語。一部恋話メインでないものもふくまれています。

【注】R15の記載はごく一部の話だけとなっています。

輝石

夜の街を白く染め上げるように降っていた雪も今は止み、すでに融けはじめ、消えていこうとしている。

わたしは独り、少し足早になって目的地へと急ぐ。

誰と約束しているわけでもない。……わたしだけを待っていてくれるわけでもない。

けれど、そこは暖かくわたしを迎え入れてくれるだろう。

そう……、今夜も変わらずに。

* * *

馴染みのバーで、一人グラスを傾けていると、カウンターの向こう、バーテンダーの彼が意味深な笑顔を向けてきた。モスコミューールを半分以上空け、次は何を飲もうかと考え始めた頃だった。

「何か良いことでもありましたか？」

いつも丁寧な口調で、気さくな笑顔を向けてくれるバーテンダーの彼、三井倉理みつくらみさんともすっかり顔なじみになっている。

彼の年齢は知らないけれど、わたしとそんなには変わらないだろう。三十はいつてないように思うけれど、穏やかで落ち着いた雰囲気を持っていて、ひどく年齢差を感じさせる時もある。職業柄かもしれない。

「どうして？ そんな風に見えますか、わたし」

訊き返すと、彼は「いえ、なんとなく」と曖昧に答え、わたしの手元を気にしているようでもあったけれど、先はぼかした。

良いことでもありませんでしたかと問われても、別段「良いこと」はなかった……ように思う。とくにこれといって思い浮かばない。もちろん悪いこともなくて、今日は一日、いつもと何ら変わりのない平々

凡々とした日だった。

そもそも、わたしという人間自体が平凡なのだ。外見的にも十人並み。これといった特徴もない。髪は肩甲骨にかかるかかからないかという長さで、出勤時はたいていシュシュで一つにまとめているか、バレッタで留めているかしている。もともと地味な顔立ちの上、そうして髪を一つにまとめているとさらに地味さが増して、他人にまで「老けてみえちゃわない？」と指摘される始末だ。だからといって、流行りのメイクやファッションで身を包むのは、どうも好きじゃない。というより、似合わないだろう。

日々の生活も、大きなトラブルなんてほぼ皆無と言ってよく、地味で平凡そのもの。波乱万丈でドラマチックな人生に憧れなくもないけれど、やっぱり平穩が一番だと思ってる。二十数年かけて培われてきた凡庸な性格は今更もうなおしようにがなく、そうした性格に合った面白みのない人生をこれからも歩んでいくんだろうなと思ってる。諦念というより、臆しているのかも。

変化を望む気持ちより変化を怖れる気持ちの方が年齢を重ねる毎に強くなるようだ。

そして今日も、だ…

ため息をつく、不意に彼と目があつた。

彼はわたしの前に「フローズン・ダイキリ」をそつと置く。

「雪はもうやんだようですね」

「ええ。積もらなくてよかったような残念なような」

わたしは小さく笑って、彼が作ってくれたダイキリを手元に寄せた。

シャンパングラスにクラッシュドアイスを盛ったフローズン・ダイキリを味わうのは久しぶりだ。

「おいしい」

「ありがとうございます」

「あ、良いことあったわ。今、こうしてとびきりおいしいカクテルをいただけ」

「それは……、嬉しいことを言ってくれますね、晶枝さん」あきえ

「お世辞じゃないですよ？ 本当においしいからこうして頻々と来てるんです」

「ええ」

彼の涼やかな目元がやわらいだ。

営業スマイルというものなんだろうけど、それがとても自然で、嫌味がない。

当たりの柔らかい笑顔と話し方。それは彼の作ってくれるカクテルのように、すんなりと受け入れられる。そして心を落ち着かせ、一方で程良い熱も与えてくれる。

カウンターの外にいる三井倉さんはどんなだろうと、時々思う。想像がつかない。

この店でしか会ったことがなく、しかも時間は夜。控えめな照明の下でしか、彼の笑顔を見たことがない。

想像がつかないのだったって当然だ。だから、なおさら知りたくなる。彼と二人で話すようになって、一年近くが経つ。

話の内容は他愛ないものばかりだ。わたしが彼に質問をすることが多い。それぞれのカクテルの名の由来やレシピ、それに料理の話もする。料理の話は、わたしもそれなりに好きで色々作ったりもするから、お互いの得意メニューのレシピを教え合ったりもした。それから日常で起こったささやかな笑い話や、たまには愚痴めいたことも吐露したりする。

けれど、わたしも彼も、個人情報それはそれほど打ち明けない。

だからわたしは、バーテンダーの「三井倉理さん」しか知らない。彼もまたわたしのことは、常連客の一人としてしか認識していないだろう。名前と顔が一致し、好きなカクテルを憶えているという程度だろう。バーテンダーとして、常連客の嗜好を憶えるのも仕事の一つだろうから。

二月半ば、まだまだ寒い日が続いて、今日だけではなく先週も雪の降った日があった。

先週とは違い、今日の雪は短時間でやんでしまった。積もったら積もったで困ることが多いから文句も出てしまうのだけど、やはり雪は好きだ。

そして好きといえば、この店のカクテル。もちろん店の雰囲気自体も好きで、月に何度か…さすがに週一とはいかないけれど…大抵は一人で来る。女友達を連れてきたこともあるけれど、恋人は、ない。

バーテンダーの彼に目をやると、彼は別の客のためにカクテルを作っていた。

グレイプフルーツジュースをつかった「スプモーニ」と、ブランドーベースの「サイドカー」は、わたしの後方のテーブル席にしているカクテルの注文だったようだ。和やかに談笑している。

他にも客はいるけれど、二人、ないしは四人でテーブルを囲んでいて、カウンター席には、わたしだけが座っている。こんな贅沢なことはめったにない。

いつもカウンターの席に座るのだけど、大抵は先客がいて、カウンター席を一人占めできたのは、今夜が初めてかもしれない。

わたしは彼に作ってもらったカクテルと、落ち着いた店の雰囲気、そして彼が「特別サービスです」と悪戯っぽく笑って差し出してくれたつまみ…ラムのきいた生チョコを堪能していた。

ラムを使ったカクテル「ダイキリ」は、ドライジンをベースにしたカクテル「ホワイト・レディー」に次いでわたしの気に入りのカクテルだ。

わりあい簡単に作れるカクテルなのだけど、簡単なだけに、おいしく作ってくれる店はけっこう稀…だと思っ。

その貴重なお店が、今わたしがいる店。おいしいカクテルを提供してくれるバーテンダーのいる店。

それがここ、知人に紹介してもらったカクテルバー「Mimos a」だ。もちろん……と喋っているのか、社団法人日本バーテンダー協会の加盟店だ。

わたしはこのお店を紹介してもらったまで、日本バーテンダー協会（NIPPON BARTENDERS ASSOCIATION）略してN・B・A・）なるものがあることすら知らなかった。それどころかバーテンダーの「認定資格」があることも知らなかった。「日本では、とくに資格がなくても働けるんですけど、就職時にはやはり有利ですよ。実力の証明書みたいなものですから」

一応僕も持っていますよと、三井倉さんは微笑して付け足した。彼が有しているNBA認定の証書は二つ。バーテンダー資格証書とバーテンダー技能検定合格証書。

「IBA認定のインターナショナル・バーテンダー資格証書も取りたいんですが、これはまだ先になりますね。経験年数が足りないこともあるけれど、何より技術的にも知識的にもまだ足りてないところが多いから」

技能検定の合格証書をとったのは、去年のことだという。年に一回の試験だそうで、一昨年は不合格だったらしい。カクテルバー「Mimos a」の雇われバーテンダーの彼は、まだまだ勉強中の身だと、自らを語る。

わたしは「すごいですね」と心から感嘆したものだ。明確な未来設計をもって、そのために頑張っている彼は本当にすごいと思う。平凡な生活の上に胡坐をかいて、積極的に行動を起こさないわたしとは雲泥の差だ。比べることすら申し訳ない。

彼は尊敬に値する人物だ。

尊敬している分だけ、……遠い。

三井倉さんとの距離をしみじみと感じていた。

やにわに、彼が訊いてきた。

「その指輪の石は、もしかしてアメジストですか？」

本日二杯目のダイキリ、フローズンではなく、ごく普通のダイキリを注文し終えた時のことだ。

問われて、一瞬戸惑ったけれど、わたしは左手を軽くあげ、「あたりです」と答えた。

「よく分かりましたね。こんなに小さいのに」

左手の小指にはめられているピンキーリングは、天然石の専門シヨップで今日買ったばかりのものだ。シルバーのリングに台座なしで嵌め込まれている、小さなアメジスト。石も小さいけれど、リングも細いし、第一ピンキーリングだから、彼は気付かないだろうと思っていた。

「ええ、まあ……」

彼は曖昧に笑って、躊躇いがちに質問を重ねてきた。

「その指輪はもしや、贈り物？」

「え？」

彼が、こういうプライベートな質問をするのは珍しい。それでちよっと戸惑ってしまった。

彼の唐突な質問に鼓動が素直すぎるほどに、高鳴った。

なんだかそれが口惜しくて……気恥ずかしくて、らしくなく勿体ぶって答えた。

「そうね、贈り物と言えば、そうかも」

「……そうですか」

シェーカーのボディーに氷を入れようとしていた、彼の手が止まった。

わたしは小首をかしげ、すぐに次の句を継いだ。

「自分からの、ね。前から欲しくて探していたの、アメジストのピンキーリング。それで今日、偶然、好みのデザインのものを見つけ、即、買ったちゃったってわけなの」

「ああ、じゃあそれが、良いことだったというわけですね？」

「あ、そうね。そういえば。うーん、でもやっぱり今日の一番良いことは、おいしいフローズン・ダイキリを飲めたこと。あんなにお

いいいフローズン・ダイキリは本当に久しぶりだったから」

「上手ですね」

「本心なんだけどな。それはともかく、ピンキーリングは、そりゃあ見つけられてラッキーだったけど、自分で自分に贈り物っていうか、ご褒美って、今日なんかは少し微妙な気分だから、良いことっていうにはちよっと、……ね」

わたしは肩を竦めて苦笑した。

そう、だって今日は二月十四日。

バレンタインデーだ。

バレンタインデーそのものは、嫌いなイベントじゃない。かといって、乗り気になれるイベントでもなかった。

今日も、とくにチョコレートあげた人はいない。

会社で義理チョコを配っている人もいたし、友達同士でお菓子を交換してる子達もいた。だからといって、自分もそれに倣ってチョコレートを上司達に配りまくろうなんて気には全然なれなかった。これは学生の頃から変わらない。……「本命チョコ」ならあげたこととはあるけれど、それはもう随分と前の話だ。

わたしはちらりと三井倉さんを見やった。

用意してくればよかったかなと、心の隅で思わないでもない。

だけど客から贈られるチョコなんて、そんなに嬉しいものじゃないだろう。なにより、わたしが嫌だ。 「義理チョコ」に思われちゃうのは。

「アメジストは」

カウンターの向こう、彼はわたしのためにカクテルを作ってくれようとしていた。グラスを用意するために一度その場から離れたけれど、すぐに戻ってきた。

用意されたカクテルグラスは、わたしが座っている位置からは、並べられた様々な種類の瓶や新鮮なフルーツの盛られた藤籠などに隠されて、ちょうど見えない。

彼が、わたしを見つめて言った。

「アメジストは、二月の誕生石でしたね？」

「ええ。よく知ってますね。そういうことにも詳しいんですか？」

「さあ、詳しいというほどでもありませんが」

話を一旦止め、彼はシェーカーを振る。そしていつも通り慣れた手つきで、グラスにシェーカーされたカクテルを注ぐ。

「アメジストの名の由来は、ギリシア語でしたね。酒に酔わない、という」

「へえ……。それは知らなかったな。やっぱり三井倉さん、詳しいですね」

「まあ、それなりです」

彼は、わたしの前にカクテルグラスを置く。ダイキリは、無色透明のカクテルだ。グラスも同様に、なんの色も柄もない、透明のカクテルグラス。

「……あ、の……、これ、は」

カクテルグラスの中、いつもなら入っていない物が沈んでいた。

……氷ではない。フルーツでもない。照明の光を受け、控えめな輝きを見せている、紫色のそれ。

「そうしてアメジストを入れておくと、酒に酔わないといえますよ」
「で、でも……っ」

カクテルグラスに沈んでいるのは、アメジストではあるけれど、それ以前に……

戸惑うわたしに、彼がとびきり優しい笑顔を見せて言った。

「誕生日おめでとう、晶枝さん」

「……………」

わたしは絶句していた。……どうして知っているのかと訊くこともできない。みるみるうちに頬が熱っていくのが、自分でもわかる。まるで、初な少女にもどったようだ。胸がどきどきと高鳴っている。
「今日、誕生日だったよね？ 前に一度、バレンタインデーが誕生日なんて、なんか微妙な日に生まれちゃったなあってこぼしたの、

憶えてない？」

彼は急に口調を変えてきた。それは、バーテンダーではない、素のままの三井倉さんの口調なのだろうか。

「よ、よく、憶えてましたね……」

「うん。気になる人のことだから、気に留めてた」

「……今、なんて……？」

「誕生日だし、ついでに言えばバレンタインデーだから、その機に乗じてみようと思って。だからチョコレートも用意してみた。ああ、義理じゃないよ。本命だから」

彼が特別にと言って出してくれた、生チョコ。それを見てまた絶句した。

「……………」

我ながらなんて鈍いんだろうと焦ったけれど、気付かなくたってしょうがない。だって、こんなの想定外だもの……！

わたしは動揺しきって、出されたダイキリを飲む余裕もない。けれど彼は優しく微笑んで、「冷たいうちにどうぞ」と促してくれた。

わたしはぎこちなく頷いて、冷えたダイキリを一口、口に含む。

口の中で、フレッシュライムの爽やかな香りが広がった。嚙下すると、それがきっかけとなって胸が開いていく。

カクテルグラスを持つ手が震えていないのが不思議なくらい、どぎまぎしている。三井倉さんのまっすぐなまなざしを受けているのが恥ずかしい。

俯いて、そしてグラスの中、ダイキリに浸されているアメジストの指輪を見つめた。

その後、「要らないなら、そのままグラスに入れておいて」と言った彼に、わたしはとんでもないとばかりに首を横に振って応え、それがそのまま、彼の気持ちの応えになった。

散歩

ひどく蒸し暑い。空を見ると、むくむくと立ち上がっている入道雲だけでなく、灰色の重たげな雲が群がってきていた。

一雨くるかもしれないな。

彼がそう言つて空を見やったのに倣い、少し後ろを歩いていた彼女もまた空を見上げる。その直後だった。

ガツと鈍い音がして、「いったあいつ！」という声が上がった。

「どうした、美晶^{みあき}？」と彼が驚いて振り返ると、彼女 美晶はその場にへたり込んでいた。どうやら側溝のコンクリートの僅かな隙間に、ミュールの踵がはまり、その拍子に足首を捻つたらしい。

美晶は左の足首をさすりながら、「尚くん、痛いよう」と、ちょっと情けないような恥ずかしいような顔を、彼 尚之^{なおゆき}に晒した。

「大丈夫……じゃ、なさそうだな？」

「折れちゃったかもっ！」

「そんな程度で折れるわけないだろう」

と言いつつ、尚之は内心、美晶のきゅっと締まった細い足首は、ほんの少しの衝撃でも折れてしまうのではないかと思っていた。

実のところ、美晶が「折れちゃったかも」と不安がったのは、自分の足ではなく、買ったばかりのミュールの踵のことだった。しかしそれを言えば尚之を呆れさせてしまう気がして、黙っておくことにした。

「捻ったんだらう。ああ、無理に動かして体重かけるなよ？」

「うん……」

美晶は頬と鼻の頭と目を赤くしている。痛がっているが、アスファルトにぼてりとお尻を落とさない。不安定な格好で、その場にしゃがみこんでいる。

「ほら、手を貸せ。支えてやるから」

尚之は口調だけでなく、顔つきもどちらかといえば無愛想で、強面だ。だが、心根の優しい人だということは、美晶はもうずっと昔から知っている。尚之が、美晶のドジっぷりをよく知っているのと同じくらいに。

「ん……」

「立てそうか？」

「どうにか……」

どうにか、と美晶は言うが、やはり相当に痛いらしく、立とうにも立てないと困った顔をした。

「……しようがないな」

尚之はため息をつき、それから軽々と美晶を抱き上げた。

美晶が「わっ」と驚きの声を上げると、尚之は「つかまってる」と首に腕を回すよう美晶を促した。

「と、靴が落ちたな。……拾えるか？」

「う、うん」

突然のことに美晶は焦ったが、尚之は顔色一つ変えない。尚之は落ちた靴を美晶に拾わせるため一度腰を落とした。美晶は両の足から脱げてしまったミニールを急いで拾い、それを確かめると尚之はまた腰を伸ばした。

「尚くん、ごめんね？ お、重たいでしょ？」

「ああ」

「そういう時はウソでも重たくないって言うの！」

美晶はむうつと頬を膨らませて、文句をつける。ふくれっ面の美晶は、とても成人式を三年前に済ませたとは思えない子供っぽさがある。童顔というわけでもないのだが、所作の一つ一つがあどけない、少女っぽい。五年前に出逢った頃から、そういうところはちっとも変わらない。

尚之は口元を綻ばせ、

「重たくない。ウソじゃなく」

と、訂正した。

* * *

両親の理解を得て、尚之と美晶が同棲生活を始めたのは、つい昨日のことだ。

そして今日は日曜日。アパート周辺を見て回ろうと、二人は散歩に出た。小一時間ほど、スーパーやらコンビニやらレンタル屋やらの在り処を確かめるために歩き回り、そろそろアパートに戻ろうかというところだった、美晶が躓いたのは。

「尚くん、ごめんね」と申し訳なさそうに言いながら、しかし美晶の頬は緩みつぱなだった。

まだ日は明るく、そろそろ昼食時かという時間帯だ。大通りからは離れ、少し奥まったところとはいえ、人の往来がないわけではない。そんな中、「お姫様だっこ」されているとは。

人の目が恥ずかしい。だけど、ちよつと嬉しかった。

尚之は辛そうな顔一つせず涼しい顔をして美晶を抱きかかえている。そして大股な足取りで、二人の「愛の巣」へと向かっている。

こんな頼りがいのあるステキな男の人が、わたしの恋人なのよ！という誇りと自慢が美晶をニヤつかせている。

美晶はふと思いついて、

「その公園を通っていいこうよ」

と、提案した。公園を横切っていけば、アパートへの最短距離だ。「最近できたばかりみたいだね。遊具がまだ全然なくて、ちよつとさびしいな」

公園の様子が見たかったと美晶は言う。抱きかかえられているのは嬉しいが、尚之に負担をかけ続けるのは申し訳ないと思っている美晶なりの、ちよつとした気遣いだった。

それに気付かない尚之ではない。

公園内は、ちょうど昼時ということもあってだろう、誰もおらず、閑散としていた。

「公園で、少し休んでくか？」

「うん。……雨、まだ大丈夫そうだもんね。あ、あそこにベンチあるよ」

「ああ」

美晶が指さしたベンチは、動物の形をしていた。一つはパンダで、一つはクマ、一つはトラ。まだま新しいため、ペンキの色も剥がれていない。

尚之が美晶をおろしたのは、クマのベンチだ。

「足はどうだ？」

尚之に訊かれて、美晶はミュールを履きなおしながら、「もういいみたい」とほんのちよつと嘘をついた。

今日履いたミュールは、尚之と一緒にシヨツピングに行った時、一目惚れして買ったものだ。濃いめのピンク色で、甲の部分には大きなリボンがついていて踵の部分が横から見るとハート型になっている。側溝にはまってしまった部分を確認してみたところ、小さなキズはついていたものの踵部分が壊れているということはなく、美晶はホッと胸を撫で下ろした。

「昔は」

やにわに、尚之が言った。

「そういう靴に慣れてない頃、よく躓いてただろ？ それもかなり大胆に。駅の階段から転げ落ちたこともあったよな？」

「あー……うん。あれはかなり恥ずかしかった」

美晶はばつが悪そうに、目を瞬かせ頬をかいて笑った。

尚之はベンチに腰掛けず、美晶の前に立っている。そうして美晶の様子を窺っているようだった。

「しかも雨の日で。ストッキングは破れるし、かばんの中身もぶちまけちゃって。ほんと恥ずかしかったなあ。だけど奇跡的に、尚く

んとの待ち合わせ時間に合ったんだよね」

間に合いはしたが、尚之には心配をかけ、その後ちょっと叱られた。

「そういう時は電話するなりメールなりしろ。慌ててまた転んで、大怪我したらどうする？」

美晶はしゅんと肩をすぼめたが、尚之が叱るのももつともなことだと、「ごめんなさい、気をつけます」と心底反省したものだ。

似たようなことが、その後も何度もあった。

美晶は決して注意力散漫なタイプではなく、むしろ職場ではてきぱきと仕事をこなす、しっかり者として通っている。しかし反面、どこか抜けているところがあつて、生傷が絶えない。大怪我こそしたことがないが、擦り傷切り傷、軽い打撲のための青痣をよくつくっていた。

たとえば、自転車のペダルを踏みそこねて危うく転びかけたり、コンビニのドアに激突したり、映画館の座席に座りそこねて尻もちをついたこともあった。

大体が笑いごとで済むからいいものの、それを目の当たりにする率が低く、事後報告される尚之にしてみれば、心配で堪らない。

尚之は、もともとの性格がそうなのか、存外心配性だ。美晶より三つ年上ということもあつて、つい保護者的な目線で美晶を見、構ってしまっていた。「子供扱いして」と美晶をたびたび不平を漏らしていたが、尚之に心配されるのは嫌いではなかった。

今でも尚之のそういう心配性なところは変わっていない。

「まったく美晶は、いつまでたつても目を離せないな」

「……うん」

尚之に呆れ笑いをされ、美晶もまた笑いを返した。

反省はしているのだが、反省するだけでは改善できないらしい。そうしたドジっぷりは、もはや美晶の個性になってしまっている。だからといって、尚之の心配がなくなるわけではないが。

「いいか、何かあつたらまず俺に連絡しろ」

「うん」

美晶は真摯な顔で頷いた。尚之もまた、真面目な顔をして美晶に言い付ける。

「無茶はするなよ？ 痛いなら痛いと言えばいい」

「……う、うん」

「さあ、腕上げる。そろそろ戻るぞ？」

言うなり、尚之は美晶の体を再び抱き上げた。横抱きにしたのは、美晶が丈の短いスカートを履いているからでもある。まさか、“おんぶ”をして両足を広げさせるわけにはいかないだろう。

「うん。尚くん、ありがとう」

美晶が尚之の首に腕を巻きつけたその時、ぽつりと、空から雨粒が降ってきた。

「雨が」と、空を仰いだ美晶の唇を、尚之はほとんど衝動的に、いや、あるいは狙い定めていたのかもしれないが、奪い、こぼれた声と息を吸った。

重ねた唇を離してから、尚之は優しく甘い声で囁いた。

「離すなよ？」

尚之の言葉の意味を察して、美晶は満面の笑顔で応えた。

「うん。うんっ、ずっと離さないからね！」

ゆるゆると降りだした雨は、やがて大粒の雨滴となり、町中を覆い、包み込んでいく。気温は下がらず、相変わらず蒸し暑い。尚之と美晶の熱烈な想いが、空に伝わったのかもしれない。

夜風

ペルセウス座流星群は、明るい流星が多い三大流星群の一つだといふ。

三大流星群に数えられるのは、一つは一月の「しぶんぎ座流星群」、もう一つは十二月の「ふたご座流星群」、そして八月の「ペルセウス座流星群」だ。

今年のペルセウス座流星群は、月明かりもあるし、天気も曇りがちで、観望条件はあまり芳しくない。

だがどうにか見られそうだと、真夜中、美歩は家を抜け出し、海岸へと向かった。

長袖のパーカーを羽織り、懐中電灯とシートと蚊取り線香、それからペットボトルと携帯電話も忘れず携え、流星群の観察に出かけた。家族には言わずに出てきた。

別段、天体マニアでもない美歩だが、何とはなしに見たくなかった。「今夜、たしか流星見られるよな」

と、彼が言ったのがきつかけだった。

同じクラスの、そこそ親しい男子だ。

むろんその彼にも、流星を見に行くなんて一言も言っていない。

家も近いし、誘えばもしかしたら同行してくれるかもしれないが、あくまで「かもしれない」程度の仲だ。

それに……。

美歩は嘆息し、月明かりの下をとぼとぼと歩いた。

深夜二時、若い娘が一人で出掛ける時間帯ではなかるう。ちよつとアブナイかなとも思ったが、なにぶん田舎町のことだ。海水浴場もここからは遠く、良からぬ連中がたむろしていることもない。よほどの危険はないとふんだ。

松林が見え始めた。月が明るく、懐中電灯はいらなくらいだった。空を見上げると、ところどころに薄雲はかかっていたが、星は良く見える。

「あー、オリオン座だー」

独語しつつ、美歩は松林を抜けて、海岸に近付いた。ザザアツと、波の音がする。聞き慣れた波の音だ。海面は見えなかったが、凪いでいるようだ。

辺りを見回しても他には誰もおらず、波の音と松風の音、それから遠くに流れる車の走行音くらいしか聞こえない。

深夜ということもあり、さほど暑くない。が、空気はやや蒸している。潮風がほんの少しだけ不快だった。

朝昼晩と、どの時間帯でも来たことのある海岸だ。しかし、深夜に一人で来たことはさすがになかったなど、美歩は苦笑した。

手ごろな場所を選んでシートを敷き、そこに腰を下ろした。ペットボトルのキャップを開けてちよつとぬるくなってしまった水を飲んで喉をうるおし、それから美歩はまた大きなため息をついた。

昼間見た光景が脳裏に焼き付いて離れない。

美歩は背を丸め、膝を抱えた。

「……………」

ぎゅつと目を瞑ると、彼の笑顔が瞼の内に浮かんでくる。

楽しげに笑っていた、彼。それは美歩に向けられた笑顔ではなかった。

「流星が見られるな」

その言葉も、美歩に向けられたものではなかった。

彼の横に、見知らぬ女の子がいた。栗色の巻き髪が華やかで、目のぱっちり大きい可愛い女の子だった。

じっくり見たわけではないが、おそらく同い年くらいだろう。美歩もほっそりとした瘦躯だが、彼女もまたずいぶんとスリムで……しかも、美歩と違って胸は大きかった。ショートパンツから伸びる足も白くてキレイだった。じっくりとじっくり見たい気はなかったが、

意に反して、目はしつかりと彼女を観察していた。

かないつこないと、落胆した。

彼に、つきあってる彼女がいるなんて知らなかったけれど、親しそうだった。きつとあの女の子は彼の「彼女」なんだろう。二人並んで歩いているところを偶然目撃してしまった美歩は、夏の日差しではなく、その光景にショックを受け、眩暈すら起こした。

一人で勝手にショックを受けているだけだ。そのことがまた美歩を落ち込ませた。

「あゝあ……」

美歩はごろんと仰向けに寝転がった。

月はもう西方に傾きかけている。夏の星はどこかぼんやりとしていて、光が淡い。流星はなかった。

「失恋、かなあ……」

口にしたものの、けれどどこかでまだ希望を持っている。そんな自分が滑稽だった。

彼から、色良い言葉をかけられたことなんてない。それでも、もしかして好意をもたれているかも……なんて思ったことはあった。少なくとも嫌われてはいない。だから「もしかして」という期待を保持していた。

ざわざわと、松の枝先がそよいだ。

その時だ。背後に人の気配を感じ、美歩は全身をこわばらせ、慌てて上半身を起した。しかし怖くて振り返れない。

砂を蹴ってこちらに近寄ってくる足音が聞こえる。それが次第に速まって、駆けてくるのがわかった。

「井沖！？」

名を呼ばれ、美歩は弾かれるようにして振り返った。

心臓が、まだときどきいつている。

美歩は隣に腰かけた彼……菱矢尚央をぼつ然と見やっているが、

それは尚央の方も同じだった。心底驚いているようで、抱えている猫を下におろすのも忘れていた。

「そ、それ、菱矢くんちの猫？」

こんなところで、しかも一人でいったいなにやってるんだ、身の危険をちよつとは心配しろよ等、尚央の詰問と説教が一通り終わったところで、美歩はおずおずと話を逸らした。

尚央は、なんだか少し怒っている風だった。怒っているというより、深夜に一人でこんなところにやってきた美歩を案じているのだろう。まったく……と呆れたように呟いて、深々とため息をついた。

尚央が抱えているのは、尚央の飼い猫であるらしい。

「すっごい大きいね……。重たくない？」

「めっちゃ重い」

美歩に言われて尚央はようやく猫をおろした。にやあとも鳴かない。ずっしりとしたぶち猫は、美歩と尚央の間でスフィンクスのような格好をしている。

「撫でてもいいかな？」

と訊いてすぐ、美歩は左手を丸まってる猫の背に乗せた。それに反応して耳がピンと立ったが、猫パンチがくりだされることはなく、美歩はゆっくりゆっくり、背を撫でやった。

「大人しい子だね」

「そうでもないよ」

尚央は意外そうに目を見開き、それからひどく感心したような声を漏らした。

「こいつ、どっしりしてるけど、けっこう人見知りはげしくてさ。

俺以外に背中なんて撫でさせないぜ？」

「眠くて油断してるのかな？」

「それもあるかもしれないけど、井沖が……」

「わたしが？」

美歩は首を傾げ、尚央の次の句を待った。尚央は頭をぼりぼりとかき、「いや……」と言葉を濁して、その先は言わなかった。

会話が途切れて、少し気まずくなってしまうた。

美歩は、それでもめげずに会話を続けた。沈黙が怖くて、口を閉じたままではいられなかった。

「菱矢くんは、猫の散歩に来たの？」

「いや、流星群観ようかと思って。それで、こいつをボディーガードにつれてきた」

「……ボディーガードになるの？」

「不審者が現れたら投げつける」

「それ、ひどくない？ っていうか、投げつけるのも大変そうなんだけど」

「慣れてるからな」

ころころと笑う美歩につられて、尚央も朗らかに笑った。

尚央の笑顔は明るい。人懐っこい気安さがあつて、日に焼けた肌と白い歯が爽やかなのだが、月明かりの下ではまた違って見える。

なんだかとても……“男の人”に見える。美歩は胸に手を当てた。まだ、動悸がしている。

尚央は背が高く、いつもちょっと猫背気味だ。卓球部に入っているから、自然、前屈みの姿勢になるのだろうか。

美歩は視線をどこに固定してよいやら分からず、主に猫の背を見ていた。分厚くて、枕かクッション代わりに良さそうな大きさだ。

「井沖も星を観に来たんだろ？ 流星、見られた？」

「うっん」

実のところ、星なんてちゃんと見てなかった。

尚央のことばかり考えて、流星どころではなかったから。

「今日は月が明るいもんなあ」

尚央はごろりと体を横たえ、腕を頭の後ろに回した。

「せっかく来たんだから観たいもんだけど、どうかな」

「うん……」

美歩も、そつと体を倒した。そして夜空に目をやる。瞬く星座の間に、まだ星は流れない。

暫時、沈黙が二人の間に落ちた。波の音と風の音、そして二人と一匹の息遣いが夜のしじまに流れている。

沈黙を破ったのは、二人同時だった。

「なあ、井沖」

「ねえ、菱矢くん」

声が重なり、二人はぱつと顔を見合わせ、またすぐに逸らした。二人とも、流星を待ちながら、しかし内心はそれどころではなかった。

「な、に？」

どきどきと鳴る胸を押さえつつ美歩が訊くと、尚央は「井沖こそなんだよ？」と訊き返してくる。

目が合った瞬間に言おうとしたことが霧散してしまった美歩は、なんでもないとさえ言えず、少し逡巡してから、つい墓穴を掘るようなことを切り出してしまった。

「今日、ね、昼に菱矢くんのこと、見かけた。女の子と一緒に歩いてたよね？ あ、あの子って、菱矢くんのこと……」

「ああ、あれ、坂口の彼女」

尚央は美歩の語尾を断って言った。

「坂口くんのこと……彼女？」

坂口というのは、美歩と尚央と同じクラスの男子だ。尚央とはとくに親しい。

美歩は顔を横に向け、ちらりと尚央の様子を窺った。尚央は依然夜空を眺めている。

「うん。坂口んとこ行くこうとした途中で会ってさ、それで向かうところも同じだしってんで、一緒に歩いてた」

「そう、なんだ……」

勘違いだった。美歩はホツとしたものの、それでもまだ心に雲がかかっていた。もしかして思わせぶりなことを言ってしまったのかもしれないと、焦ってもいた。そしてその焦りを、尚央に突っこまわってしまった。

「井沖、あの子のこと、俺の彼女かもって思っつて、焦った？」

尚央の問いかけは直球だった。

尚央がこちらに顔を向けた。美歩はとっさに顔を背け、「焦ってなんかないっ」とつい強がりを言っってしまった。

でもそれは嘘だと、尚央は気付いただろう。もしかしたら笑われているかもしれないと思うと、さらに気恥ずかしさが増して尚央を見られなかった。

「……俺はさ、すっげー焦ったよ。こんなところに井沖一人でいてさ。なんかあつたらどうするんだよって」

尚央の手が下にさがり、二人の間でどっしりと腰を据えているぶち猫の背に置かれた。この季節、猫の毛はずっと触っていたいものではない。手のひらが汗ばんできた。しかしそれは猫を撫でてるせいだけではない。

「ごめん。それは、反省してます」

「だから、今度からは俺を呼べよ？」

「……でも」

彼女でもないのに、こんな夜中に呼びだせない。気軽に誘えないよ……そう返そうとしたが、喉がきゅっとしまって、声にならなかった。

切なくなつて、泣きそうになった。

尚央はそんな美歩の心の機微を感じとったのか、返事は待たずに語を継いだ。ためらいを押しつけたような、語気の強さがあった。

「好きな子になんかあつたら、すげーヤだし」

尚央が言い終えないうちに、美歩は「あっ！」と声を上げた。

ヒュッと、音が鳴ったような気がした。白い筋が流れ、瞬く間に消えた。

「流星だ……」

美歩の独語に、尚央は流されてしまった自分の言葉を惜しみつつも、空に視線を戻した。あいにく、星は連続しては流れなかった。が、しばらくすると、今度は先ほどよりも小さく細い流星があった。

尚央も思わず歓声をあげる。

「見られたな」

「うん、見られたね」

「流れ星って、なんかどきっとするよな、流れる瞬間」

「うん、どきどきするよね」

そうして美歩と尚央は声をひそめてクスクスと笑い合った。胸の鼓動は潮騒のように止まないが、それも心地よさに変わっていった。夜風が松の枝先を揺らして渡る。

ややあつてから、美歩は切り出した。頬が紅潮している。

「流れ星に願いを唱えると叶うっていうでしょ？ 流れている間に三回唱えるんだったかな……そんなの無理だけど、でもね、なんだから、……願ひ叶っちゃったみたい」

尚央は照れくさげに「そっかあ」と笑い、猫の背を撫でていた手をもう少し先に伸ばして美歩の手を探り当て、そつと握った。

雷鳴

「目を瞑って」
促され、夕実花は素直に従った。

夕実花の心はとうに決まっていた。この時を待ってもいた。けれどやはり、いくら大好きな彼とはいえ、すべてをさらけ出してしまうのは恥ずかしくて、怖い。

そんな不安が夕実花の体を戦慄かせていた。

* * *

思い叶って、付き合うことになった彼、駿しゅんのアパートに招き入れられたのは、突然の夕立のせいだ。雨脚は強まり、雷も鳴っている。夕実花は遠慮がちに、けれど「何か」を期待して、駿の部屋に上がった。

初めて足を踏み入れた彼の部屋。

夕実花は部屋中を見回したいのをぐっと堪えて、俯いている。駿が何かを言っても、曖昧な相槌を打つばかりだ。

気もそぞろな夕実花は、雷鳴に耳を塞ぐどころではなくなっていた。

雷はまだ遠く、それよりも窓ガラスを叩きつける雨音が、ひどく耳についた。

夕実花の服も髪も、まだ少し湿っている。それは駿も同様だ。降り出した雨に多少濡れたが、着替えるほどでもない。

駿は夕実花にタオルを貸してやり、自分は髪を濡らしたままでい

る。夕実花のように長い髪ではないから、放っておけば自然に乾くだろう。

「何か飲むか？」

と、駿が問うと、夕実花ははかなげに「うん」と頷いた。

いつも元気すぎるほどに元気で陽気な夕実花だが、すっかりおらしく畏まっている。

雨に打たれて頂垂れている花のようだなと、駿は微笑し、その花の為に甘くて酸っぱいオレンジジュースを出してやった。

コップを両手で包み込むようにして持ち、夕実花は落ち着かなげに駿の顔を窺いながら、ジュースを飲む。嚙下する音と白く細い喉が、やけに眩しい。

駿の口から苦笑まじりのため息がこぼれ出た。

駿は高校の教師だ。そして夕実花は、元教え子。教え子、といっても、夕実花のクラス担任だったことはなく、夕実花が所属していた天文部の顧問だった。

夕実花に“告白”されたのは、夕実花が高二の時。バレンタインデーに、本命だと言ってチョコを差し出された。

当時、駿は夕実花のことを「元気で可愛い女の子だ」と思っていたが、それはあくまで教え子に対しての評価であり、恋愛の対象外で、そもそもそういう目で生徒を見てはならないと自戒し、弁えていた。

だから夕実花に差し出されたチョコも、礼だけを言って、受け取らなかつた。

本命だといったところで、夕実花が本気だとも思っていなかつた。たんに、若い独身男の教師にミ〜ハーな気分で憧れているだけだろう。その漠然とした感情を、恋だと錯覚しているに違いない。女子高生らしい、夢見がちで独りよがりな恋愛ごっこなのだろうと。

しかし夕実花はどこまでも本気だった。たしかに最初は駿が思っ

ていたように、漠然とした憧れだった。上背もあるし、容貌も整っている。厳しいところもあったが気安げな性質だったから、生徒たちの間でも駿の評判は「けっこういい先生だよね」と概ね好評だった。

夕実花は一年の頃から天文部の顧問だった駿と少なからず関わりを持っていたが、意識しだしたのは、二年になり、天文部の部長になってからだ。話す機会が自然と増え、そうして月日を過ごすうちに、夕実花の心はもはや変えようもなく、決まってしまった。バレンタインのチョコを受け取ってもらえなかったからといって、それであっさりあきらめられるほど簡単な想いではなくなっていた。

夕実花は、駿が呆れ、途惑うほどの積極さとひたむきさで、想いを体当たりにつつけてきた。怒られることもあった。泣かれることもあった。とまどう駿に、困ったような微笑を向けてくることもあった。申し訳なさそうな顔をし、しばらく距離を置かれたこともあった。

だが、夕実花は決して前言を撤回しなかった。「好き」という自分の気持ちを否定しなかった。

夕実花は一途すぎるほどに、駿をまつすぐに見つめ続けていた。夕実花の瞳に映っているのは、教師としての駿でなく、ただ一人の男としての、駿だ。

駿の気持ちは、次第に傾いていった。ほだされやすい性格ではなかったはずだが、夕実花の純粹で真正直な恋心にはほだされずにはいられなかった。

結局、夕実花の想いを受け止めたのは、夕実花が卒業してからだ。

「好きなんです！先生の彼女にしてください」という何度目かの告白に、駿は「物好きだな」と苦笑して応えた。

「物好きなのは、いけませんか？」

「いや？ いけなくはないさ。人それぞれってやつだからな」

「わたしが好きなのは先生です」

夕実花は繰り返した。大事なことから念を押すように。根負けしたといった体で、駿は自分の気持ちを認め、それを夕実花に伝えた。

「俺も、どうやら好きになったようだ。夕実花のこと」

「はっ、はいっ！」

夕実花は満面の笑みを浮かべ、目を輝かせて言った。

「先生、これからわたしにいろんなこと教えてください。わたし、先生から教わりたいことがいっぱいあるんです！ 先生のこと、もっともつと知りたいんです！」

* * *

夕実花は、駿にとって意外性のかたまりのような存在だ。

意外なことに、駿は夕実花にとって初めて付き合う男性だった。

初恋の経験はある。告白されたこともある。だが、縁がなかったのか、付き合うには至らず、恋は終わった。

美少女というほどの容貌ではないが、十人並みと評される程度の容姿でもなく、全体的に均整のとれた、そこそこに可愛らしい外見の夕実花だ。モテないこともないだろうにと、駿は口にこそしないが、つい不思議そうに夕実花を見てしまう。

その夕実花も、今では女子大生だ。ほんの数ヶ月前まで女子高校生で、セーラー服姿のイメージがまだ抜けきっていないものの、ふと大人びた顔をするようになった。

そうはいってもまだまだ幼い。夕実花の初々しさは、駿の頬と心を緩ませてしまう。

両の手のひらでぎゅっと包み込んで小さく握り、ぱくりと食べてしまいたいほどの可愛さだ。

雨に髪を濡らし、緊張した面持ちで駿を見つめている夕実花の愛らしさは、いったいどうしたものか。

駿は辛うじて理性的な態度を崩さずにいるが、それも時間の問題だ。

夕実花を部屋に上げてしまったことを、駿は少しだけ後悔していた。

夕実花は、意外なことを言う。それもなんの脈絡もなしに、だ。

夕実花は恨めしげな目を駿に向けて、唐突に言った。

「先生、わたしのこと、ちゃんと……好きですか？」

「なんだ、いきなり？」

駿は面喰ったように、床に座っている夕実花を振り返り見た。夕実花の顔は真剣だ。じっと、駿を見つめている。そして意を決したかのように、言った。

「わたし、……魅力ありませんか？」

「……………」

駿は思わず眉をひそめた。

夕実花が何を言わんとしているのか、それが分からないほど愚鈍ではない。分かるからこそ、駿は沈黙して応えなかった。

夕実花はまだ半分以上残ったオレンジジュースをテーブルに置いた。切なげなまなざしを、一心に駿に注ぐ。

「わたし、先生のこと知りたい。教えてほしいんです。……わたし、どうやってたってもっと先生に近付けるの？」

「夕実花」

駿は夕実花の前に片膝をついた。ややためらい、そっと手を伸ばす。その手を拒むように、夕実花は顔を背けた。

夕実花の茶色みを帯びた少し癖のある髪から、仄かに甘い香りがする。雨に濡れたせいだろう。その香りに、駿は軽い目眩を覚えた。白いうなじも濡れた髪も、すばめている華奢な肩も、どれほど駿の心を惑わせ、乱しているのか、当の本人はまるで気が付いていない。それどころか、

「いつも子供扱いして」

と、夕実花は傷つけられたような顔をし、駿を責めるのだ。やれやれとため息をつきたいのを駿は堪えていた。夕実花こそ駿を「いつも大人扱いして」いるのではないかと反駁したくなる。夕実花が思っているほど、自分は大人ではない。

「先生を困らせることばかり言つて、こういうところが子供なんだつて、分かってます。だけどわたし、先生のことが好きで。好きで、どうしたらいいのか分からないんです。だから……」

「夕実花」

駿は低い声で夕実花の嘆きを遮った。

「夕実花、目を瞑つて」

「え……」

「瞑つて」

「……………」

夕実花は泣きだしそうになっていた目を大きく睜らせ、駿を見つめ返した。そして顎を引き、こわこわと目を閉じた。

臉を落とし、視界から駿の姿を消す。ぎゅつと眉間に力をこめ、肩を竦ませた。胸の前で両手を組み、高鳴る鼓動を隠そうとした。

夕実花の手は緊張のあまり小刻みに震えている。

「……………そう緊張されると、やりにくいな」

駿は夕実花の顎を指先に乗せ、上向けた。だが、そのままでは止まらなくなってしまっている。

「……………」

夕実花は夕実花で、もうどうしたらいいのかわからない。じつとして、駿の次の行動を待つしかないといった体でいる。

一瞬の沈黙。苦しくも甘い、そして熱のこもった沈黙は、しかし突然の閃光とその直後の雷鳴によって打ち破られた。

「きゃあぁっ！」

天が割れたかのような激しい雷鳴に、夕実花は耳を塞ぎ、体を縮

こまらせた。

続けて、雷は鳴る。今度はどこか近くに落ちたようだ。ビリビリツと窓ガラスが揺れた。空間が、続けざまの雷鳴に振動している。

夕実花は半泣きになり、雷に怯えていた。

「夕実花」

駿は震える夕実花を包み込むようにして、抱きしめた。宥めるように髪や背を撫ぜる。

「怖がりだな、夕実花は。大丈夫、すぐ雨も雷もやむよ」

「……せ、んせ……」

「そうしたら、家まで送ってく」

「……」

「それまで、このまま……もう少し辛抱しててくれ」

「先生……」

きゅつと、夕実花は駿の胸元を握る。その手はまだ震えていた。

「先生、わたし、まだ目を瞑ってます。……いつまでこうしてればいいんですか？」

声も、少し震えている。

駿は体を僅かに離し、言われたまま目を瞑っている夕実花の顔を見た。まなじりが湿っている。

「いつまで……」

「いつまで」

夕実花の声に、駿は同じ言葉で声を重ねた。

そして駿は再び夕実花の顎をつまんで持ち上げた。夕実花ははつとして、つい目を開けてしまった。

駿の切なげで強いまなざしとぶつかった。

「いつまで、夕実花は俺のことを先生って呼ぶんだ？ いつまでたつても先生でしかないのか？」

「あ……」

夕実花は声を詰まらせた。

雷はまだやまない。ただ、少しずつ遠ざかりつつあるようだった。

「あ、あの、わたし、」……」

「ごめんなさいという言葉は、声にならなかった。駿に唇を塞がれ、突然のことに息をつめてしまった。

駿は一度唇を離すと、今度は角度を変え、より深く激しく口づけた。夕実花は蕩心したように瞼を閉じた。まなじりに溜まっていた涙が流れ落ちる。やがて息が苦しくなつて、「んんっ」と抗議の声を上げ、それでようやく駿は唇を解放してくれた。

「子供扱いしてたわけじゃない」

「う、ん……」

「子供だと思つてたら、こんなことしない」

「うん」

駿は恥ずかしげに俯いた夕実花を抱き寄せた。

「ただ、少し怖かった。いつまでも先生ぶつて、そうしてセーブしてた」

「……………」

夕実花は駿の背に腕をまわし、抱きつき返す。

胸が熱い。夕実花は嬉しくて、また泣きそうになってしまった。

ふざけて抱きついたことは今までに何度かあった。だが、こんなに近く、心まで抱きしめているような抱擁はなかった。

「怖かったのはわたしだけじゃないんだ」

「当たり前だ。卒業したとはいえ教え子に手を出したんだからな。

それに九歳の年の差つてのは、けっこう不安なもんなんだ。子供とかそういうのじゃなくて」

「え、あれ？ 十歳じゃなかった、年の差？」

訊き返され、駿は少しむっとしたように、体を離して、夕実花を睨みつけた。

「九歳。夕実花が来年二十歳になった時、俺は二十九」

「わたし、勘違いしてた。十歳差だと思つてたから、先生、来年はもう三十なんだなあって」

「来年もまだ二十代ですから」

ムキになって二十代を強調する駿に、夕実花は可笑しくてたまらず、ぷつと嘖き、笑いだした。そういえば「先生」は、そういうちよつと子供じみたところがあって、可愛いなあって親近感を抱いたんだっけ。

さつきまで鬱屈して萎んでいた夕実花だが、すっかり気分をよくしたらしい。

駿に手を取られ立ちあがると、明るく笑って「ありがとう、先生」と律儀に礼を言った。そんな夕実花に、駿は「それで」と切り返す。「それで夕実花は、いつになったら俺のことを名前で呼ぶんだ？」

「あ。えつと、それは……」

「まあ、先生と呼ばれるのも背徳的な感じがして悪くはないんだが」

「ええつと、そ、そのうちには……っ」

「そのうち、ねえ？」

駿はくつと喉を鳴らして笑う。

今度は夕実花がムキになり、「ほんとですからっ！」と声高に宣言した。

ふと窓の外を見ると、もう雨はやんでいた。雷鳴は遠くで轟いているが、雨雲は風に流され、やがて聞こえなくなるだろう。雲の切れ間から幾筋もの陽光がこぼれ、街路樹の枝から降り落ちる雫がその光を反射し、日暮れ時を鮮やかに彩っていた。

駿と夕実花は手を握り合ったまま、おもてへと出る。

少々蒸し暑いが、雨上がりの風は気持ちがいい。二人は顔を見合わせて笑った。

奇矯

彼にはいつも驚かされ、戸惑わされる。

今朝も相変わらずで、彼は布団を乱暴に引っぺがし、寝起きの悪い私の鼻を軽くつまんで目覚めを促した。

「花乃^{かの}、支度しろ。出かけるぞ。それともここに一人で置いて行かれないか」

悠^{ハル}くん^{ハル}にせつつかれ、私は大急ぎで身支度を整えた。彼はどこに行くかなんて一言も言わず、私の手を引っ張って目的地へと連れていく。私の手を掴む彼の右手は力強く、逆らえない。

いつも、そう。

強引な悠くんは、私の意思を確認するのはいつだって後回し。：というり、私の意思を先回りするように読んで、行動を決めてしまふ。

昨夜だってそうだった。

彼のアパートになし崩し的に泊まりしちゃうのは、これで何度目だろう。

帰ろうかな。でもやっぱりもうちょっと悠くんと一緒にいたいな。だけど今週は彼のトコにお泊まりしちゃうことが多かったから、今夜は帰った方がいいのかな……。

そんな風に一人悶々と逡巡している私の心をあっさり見透かして、悠くんは強引に私を引き止める。言葉ではなく、行動で。そうして、彼の腕にとらわれたまま朝を迎えるのだ。今朝のように。

* * *

朝、彼に連れて行かれたのは映画館だった。何を観るのかと訊く

間もなく、彼はさっさとチケットを買って私の手を引いて館内に入っていく。

悠くんの強引さには慣れていたし、寝起きでぼんやりしてたから私は文句も言わず諾々と彼に従った。

ただ、ちよつと意外だった。

彼が買ったチケットは、私がちよつと前に観たいかもって呟いた恋愛映画だったから。

彼はアクション系とかミステリー系の映画を好んで、恋愛ものなんてほとんど観ない。私が観たいって言っても付き合ってたつきあってくれなかった。

それが、今日はどうして？　どういう風の吹きまわしなんだろう……？

不思議に思いながら悠くんの顔を窺い見ると、彼は何か考え込むように眉をしかめていた。けれど不機嫌な風じゃなかった。

私の視線に気づいて「何だよ、その間の抜けたような顔は？」と返してくるくらいだから。

「間の抜けた顔させるのは誰ですか、悠くん？」

私が拗ねた口調で言い返すと、悠くんは満足げに笑う。そしてむくれる子供をなだめるように、私のゆるい癖のある髪をくしゃくしゃと撫でつけてくる。こんな時、彼の鋭く切れ長の目は優しくなごやかになる。彼の、不意にやわらぐ表情が、私の心をもやわらげてくれる。

「おまえは、そういう顔がやたらに可愛いな」

「……っ」

唐突におだてられ、私は思わず絶句してしまう。

頬が赤くなってるのが自分でも分かる。初な女の子に戻ったみたいで、自分で自分の反応が恥ずかしいっいたらない。

悠くんはと言うと、可笑しげに笑っていたかと思うと、また、ふと物憂げなため息をつき、そして私から視線を外してしまった。それはほんの一瞬のことで、不安感を募らせるには至らなかった。た

だっただけ気にかかった。

映画が始まってすぐ、うつらうつらと寝入ってしまった私を、悠くんはからかうように「睡眠不足は俺のせいかなんて言って笑う。そういうことさりと云わないようにって、私の肩を抱く悠くんの手をぺちりと叩いてやった。

懲りない悠くんは、「そういうことってのは、どういうことだ？」って切り返してくる。

「具体的に言ってみろよ」

「だから！ やらしーこと言わないでってこと！」

「やらしいことって、どんなことだよ？ ん？ 具体的に説明してもらわないと分からないな」

「もおっ、悠くんっ！ いい歳して子供っぽく絡まないでよ！」

「おまえも、いい歳して子供っぽく拗ねるなよ」

「もおっ！」

私達の、こういう他愛無いやりとりは傍から見るともしかして「バカツプル」的なのはしゃぎようなのかもしれない。

だけど、悠くんの冷厳そうな見た目がバカツプルのな度合いをちよつとだけ下げてくれるかもしれない。悠くんはオーバーなリアクションもしないし、声も昂らせない。私が一方的に喚きたてる……喚かせる原因は悠くんにあるんだけれども。

私より二つ年上の悠くんは、細面で鼻梁も高く、端正な容貌をしていて、ちよつと近寄りがたい雰囲気がある。一重瞼で切れ長の眼は鋭く、声の調子も低くてずしりとした重みがあつて、それらが凜とし、厳然としたイメージを作っているのかも。実際悠くんは居丈高なところがあつて、話し方も威圧的だったり命令口調だったりすることが多い。

「俺様」な男と言えなくもないけれど。

それほどには、悠くんは「俺様」な性格じゃない。

だって、おまえが観たいと言ったから連れてきてやったのに寝かけてるっていうのはどういうワケだ、っていう風に、私を責めたりはしないもの。

意地悪なんだか優しいんだか分からなくなる彼だけど……、結局のところ彼は甘いんじゃないかなあと思ってる。強引だけど大らかで。でもそれは、もしかすると私限定なんじゃないかなあ……なんて、ちょっと自惚れてる。

寝ていてほとんど観てなかった映画だけど、ラストだけはちゃんと観た。ハッピーエンドの恋愛もので、ラストは観ているこちらが照れくさくなるようなものだった。花束渡してプロポーズっていうシチュエーションは、ありがちだけど、やっぱりいいなあって思ってしまう。

今年二十四になったばかりの私。そんなシチュエーションに憧れるのもどうかと思うけど、乙女心に年齢は関係ないし！

でも、恥ずかしくって、さすがにそんなことは悠くんには言えない。言ったらきつと笑うだろうから……。

一方、横に座ってる彼は、腕組をし、気難しそうに眉根を寄せてエンドロールの流れるスクリーンを見ていた。

……なんだろう？ 今日の悠くんはいつもと雰囲気が違う。不機嫌なのとも違う。疲れているようでもなく、ただなんとなく妙に落ち着かなげだ。

悠くんがまどっているその奇妙な雰囲気は、なぜだか私の心の奥をくすぐってきて、不可思議な気分させた。

* * *

映画館を出た後、ランチにはまだ早いからと、街を散策することにした。

映画館からほど近いところに、一応観光スポットらしい古い街並みがある。観光地といってもさほど有名じゃないから、歩いているのもたぶん八割は地元民だと思う。

お茶も飲める和菓子屋や地酒を豊富に扱ってるらしい酒屋、和布や古布の展示即売をしている織物店や製作体験のできるガラス工房、色とりどりのバラの花で飾られた洒落た花屋に整頓されてなさそうで見えてるかもしれない古本屋なんか軒を連ねている。気持ちいい秋晴れの日で、そぞろ歩きにはうってつけだ。

「ね、さっきの花屋さん、バラの専門店みたいだったね、バラだけできれいだったなあ」

「そうだったか？」

悠くんはどこか上の空で、適当な相槌を返してくる。

「この季節は花持ちもいいし、帰りに買っていこうかな？ あと和菓子屋さんにも寄りたいかも！ この季節は何と言っても栗きんとんだし！」

「分かりやすく花より団子だな、花乃は」

「違うよ。花も団子も、どっちも好きだもんね」

「ああ、そうだな、花乃は」

さり気なく小馬鹿にされた気がしないでもないけど、いつものことだし、気にしない。悠くんの呆れたような笑い顔が好きってこともあるけれど。

「私、ここの街並みって好きだな。久しぶり来れて嬉しいよ」

はしゃぐ私の一歩後ろで、悠くんは周囲を軽く見まわして苦笑しそうにため息をついた。

「思ったより人通りが多いな。まあ、土曜だし、観光地的には賑わってないと困るだろうが」

「来週は秋祭りがあるらしいから、その日はもっと混雑するんじゃないかな？」

「……ああ」

壁や電信柱に貼られたポスターを見、悠くんは「もうそんな季節

か」と呟き、その後何か考え込むように顎を撫でた。

それから悠くんは不意に足を止め、私の手を掴んだ。そしてすぐそばにある神社を指さして、唐突に言った。

「その神社の、銀杏の下のベンチで座って待ってる」

「え？」

「いいから、待ってる」

「う、うん」

あまりに唐突で戸惑ったけれど、悠くんが強引なのは相変わらずでいつものことだから逆らったりせず、悠くんが促すままにベンチに腰を下ろした。

「そこを動くなよ？ なるべく早く戻るから、とにかくじっと待ってる。……いいな？」

「……………」

私はちよつと肩をすくめて、こっくりと頷いた。

いったいどのくらい、ここでこうしていただろう。

銀杏の葉がはらはらと風に流され、散り落ちる。手持無沙汰だった私はベンチの上に落ちた銀杏の葉を手にとって落し、また別の葉を拾って、手放した。

風が出てきたけど、日当たりのいい場所だから寒くはない。中天にかかっている日が眩しいくらいだ。

悠くんはまだ戻らないのかなあと考えてる頭の別のところで、そろそろお腹空いちやっとなあ、お昼は何を食べようかな、悠くんは何食べたいのかなあ……って、ぼんやり考えていた。そうしているうちに悠くんは戻ってきた。

さっきまで手ぶらだったはずなのに、足早に私のもとへ来た悠くんの手にはなんと白バラの花束が握られていた。

「……悠くん？」

私は小首を傾げ、悠くんの様子を窺った。悠くんはむっつりと黙

りこみ、眉間に深々と皺を寄せてる。けれど怒ってる風ではなくて、……なんだろう、緊張してる……ような？

「花乃は、バラなら白が好きだって言ってたな？」

問われて、私は目を瞬かせた。

「う、うん、それは、……うん、好きだけど……」

私が、白バラが好きだからって、わざわざ買ってきてくれたのかな？ そういえばさっきの映画、ラストシーンで男の人が恋人に渡してた花束は赤バラだった。両腕にいっぱいバラを、愛の告白とともに押しつけるようにして渡してたっけ。

私、そんな物欲しそうな顔してスクリーンを見てたのかな？ ……

……そんな気がしないでもないけれど。

「花乃」

「……？」

戸惑いがちに、悠くんが私の名を呼ぶ。そして、沈黙が落ちる。

悠くんは座ったままの私の前で眉をひそめて佇んでいる。花束を私に渡すことなく、中途半端な位置で白バラを私に向けていた。

私はじつと悠くんを見つめ返し、次の言葉を待った。やがて悠くんは意を決したように言葉を継いだ。

それは、いつもの悠くんらしくない少しぎこちない声音だった。

「花乃、……俺と、結婚してほしい」

「……え……？」

思いもかけない悠くんの告白に、私は息を詰めた。

今、悠くん、なんて言った？

訊き返したかったけれど、訊き返さなかった。悠くんの告白はちゃんと耳に届いていたから。それにきくと、二度は言ってくれない。悠くんはそういう人だ。いつもの彼からは想像しがたいけれど、本当はとも照れ屋なんだってこと、私はちゃんと知ってる。

そう、……そういう人なんだ、悠くんは。

強引で、命令口調で、独断的で、私をぐいぐい引っ張って前を歩いて行く人だけれど、私を無視したりはしない。私の意思をちゃん

と尊重してくれる。

もしかして悠くんはずっと考えてたのかな？ プロポーズしようって、映画を見ている間中？ 映画に行くぞって誘った朝から？ それとももつと前から私との未来を考えてくれたのかな？

今日悠くんが気難しげな顔をしていた理由が分かって、私は体が熱くなるくらいに嬉しかった。

悠くんが持つてる白バラの花束は、両腕で抱えるほどではなくて見たところ二、三十本くらいだ。しかもほとんどが蕾の状態で、ラッピングはされてるものの、いささか地味な花束だ。けれど、悠くんが持っているからか、ものすごく貴重なものに見える。なんてきれいな白バラなんだろう。

私は立ち上がり、悠くんからバラの花束を受け取り、そして彼の右手を握った。悠くんの手は熱く、ほんの少し汗ばんでいた。

いつだって迷いなく事を決める悠くんだけど、肝心な場面で弱気になったりもする。でも引き気味にはならず、押さえるところはちゃんと押さえて、そうして私に決定権を委ねてくる。たとえば、今みたいに。

「悠くん、バラ、ありがとう」

「あ、……ああ」

いつも強気な彼の、不意に見せられる弱気な一面が好き。

もしかしたら計算かも……って思うと癪だけど、それだってたぶんお互いさまだから。

私にはっこりと強気な笑顔を見せ、彼が待っているだろう応えを口にした。上目遣いに悠くんを見つめ、そして普段の彼らしい命令口調をちよつとだけ真似て。

「悠くん、私と結婚して。この手をずっと離さないで」

「ああ」

悠くんは安堵したように笑い、私の手を強く握り返してきた。

「前言撤回はなしだからね？」

「分かってる。花乃こそな？」

「うん、悠くんもね」

私達は緊張を解きほぐし、笑い合った。

私は悠くんの手を握ったまま歩きだし、悠くんは私に歩調を合わせてついできた。

悠くんの右手は熱くて、その熱が指先を通して私の全身に伝わってくる。幸せな気持ちがじんと痺れるような痛痒感を伴って、のぼせ上がってきた。

幸福感に満たされて、ふわふわと心が浮遊してる。嬉しくて、頬は緩みっぱなしだ。

悠くんも同じ気持ちでいるといいな。

そんなことを思ってる私の顔を覗き込んで、悠くんは不敵に笑った。

「花乃、おまえ、顔真っ赤」

「……………」

悠くんにはいつも驚かされる。だけど、それよりももっといっばいに、私を嬉しがらせ、喜ばせてくれる。

いつもの余裕を取り戻した悠くんが、ちよっぴりこにくたらしかつたりもするのだけど。

呪術 魔法使いになりたい！

どこをどう辿ってきたものか。

何の前触れもなく、その娘は魔術師の前に現れた。

あわただしくノックされ、返事を待たずに扉は開いた。一切の迷い、戸惑いといったものが感じられない、豪快な開け方だ。鍵の存在など、考えもしないのだろう。

娘は扉を押し開けるや、開口一番、言い放った。

「わたしを弟子にしてくださいっ！」

何の前置きもない。

まったくもって唐突な申し出だった。

* * *

古めかしい布張りの椅子に足を組んで座り、黙然と分厚い本に目を落としていた男は、突然の闖入者に驚く気配もなく、一瞥しただけで、すぐに視線を元に戻した。

椅子の背もたれにとまっていた一羽のガラスだけが首をめぐるせ、開け放たれた扉の方に目を向け、羽をぶるつとふるわせた。しかし一鳴きもせず、男同様にすぐに突然の来訪者から目を逸らし、沈黙を保った。

「ちよつ！ なんですか、ノーリアクションですか！ 突然なんだとかおまえは誰だとかどうしてここが分かったのかとか、そういうツッコミも一切なしですか？」

男のもとに飛び込んできた娘は、現れ方がそうだったように、実に気忙しい。男の無反応さを攻め立てたかと思うとハタと気付いたように、「あつ、そうか」と声を上げると、大きな目をさらに大きく見開いて、首を左右に振って周りを確かめた。娘の長い髪が軽やかに揺れる。

「もしかして今日の前にいるのは人形か何かで、本物は別室からわたしを覗き見て、弟子にするのに相応しいかどうかチェック中？ そっか、なるほど、そのカラスですね？ そのカラスの目を通じて観察してるですねっ？」

娘はズバズカと踏み込んでくる。近づいてくる娘に対し、カラスは身を低くして構えた。カツと威嚇の声を上げたが、娘はへこたれない。それどころか、

「えーっと、こんにちは。んと、もしかしてここは夜の時間？ だとしたらこんばんは」

などと、友好的な笑顔を向けて話しかけてくる。

「カラスって強面かと思ってたけど、よく見るとけっこう……やっぱ怖いけど、かわいい……かも？」

度胸があるとも言えるが、単に図々しいだけかもしれない。実際、娘は初対面の挨拶すらせず、いきなり自分の用件を男にぶつけてきた。が、今はその用件から、話は逸れまくっている。

「ペット、じゃないですよねえ？ えーっと、眷属とか使い魔とか、そんな感じですか、このカラスさん？」

娘は呑気にカラスに話しかけながらも、やはり人間を相手に喋りたいのか、椅子に座ったまま身じろぎもしない男に何度か視線を流した。

男は、娘の見るところ、三十歳になるかならないかといったところだ。もっと若いかもしれないが、逆に百歳だと言われても信じられる気がした。いかにも隠遁者といった風情で、身なりは整っているが地味に落ち着きすぎ、どうにも古めかしい感じがする。

無愛想で寡黙なもの、男の生業を考えれば、納得できる。謎めいて神秘的と言えなくもない。

(うん、いい感じかも！)

娘は口元をほころばせた。想像力が豊かな娘は、男の外見だけでいろいろと妄想を膨らませることができるようだ。果ては、「これこそ運命の出逢い！」と結論付けるに至る。

「運命の出会い」の相手に認定された男は、好奇に輝く娘の視線を冷やかにはね返していた。

娘はちよつと小首を傾げ、本に視線を落としたままの男を改めて観察した。

呼吸はしているようだし、瞬きもしている。ビスク・ドールのように肌のきめは細かく美しい。

人形だとしたらものすごく精巧にできた人形で、本物もきつとこれにそっくりなんだろうかと憶測した。

髪には霊（魔）力があると娘は信じている。だから男の青みの強い鉛色の長髪を見、やっぱり髪は長い方がいいんだと、勝手に得心したりもした。

娘はとにもかくにも感激している。万歳三唱して、人形だろうと石像だろうと、目の前にいる男に抱きつきたいほどの喜びようだ。

おそらく、男がそのまま無視を決め込んでいたなら、娘は恥じらいもなく飛びついていたかもしれぬ。

「……………」

男は無視し続けるつもりだったが、無視し続けたところでこの場に静寂が戻る見込みはない。招かれざる訪問者を手取り早く追いつ返すには、来訪の無駄を悟らせるしかない。

嘆息し、男はようやく声を発した。この時初めて、男の灰青色の双眸が娘を映した。

「弟子はとらない。帰れ」
にべもない。

男は冷然と言い放ち、再び灰青色の視線を本に落とした。ぱらりとページを繰って、娘の存在をも流そうとした。

もちろん、娘は納得しない。納得するつもりもない。男が頷くまで居座る気である。

「帰りません！ やつと見つけた本物なんだもん！ 何がなんでも弟子になります。なるといったらなるんです！」

「……………」

やったら本物の魔法使いになれるか分からなくて、困ってたんです。才能は、たぶん……あると思うんですよ。ほらだって、こうしてここを見つけれましたし！」

「……………」
なるほど、娘にそれなりの天賦の才はありそうだった。

男は何度目かのため息をつき、本を閉じた。

「私は、言の葉を操る魔術師だ」

「はい？」

「呪文と言えば分かるか」

ぶつきらばうな言いようは変わらないが、男が語りだしてくれたことに娘は素直に喜色を浮かべた。

「呪文つてあれですね。アブラカタブラとかエロインエッサムとか！」

「アブラカタブラ、エロインエッサムだ」

男は苦虫を噛みつぶしたような顔で訂正した。

「そうとも言いますね」

娘は悪びれずに笑う。

「そういう呪文を使う魔法使いなんですね！」

「魔術師だ」

またしても男は訂正した。

娘はちよつと呆れたように、「はあ、そうですか」と返した。

大して違わないじゃないかと思っても、さすがにそれは口にしない。言の葉を操る「魔術師」なのだから、言葉一つ一つにこだわりがあるのかもしれない。偏屈なのも魔法使いらしくていいかも、なんて思ったりもした。

「呪文つていえば、わたし、暗唱できる呪文があります！」

娘は自慢げに言い、記憶力だけはいいからと笑って付け足した。

「般若心経です！ あれは、なんか発音が軽快で言いやすいんですよね！ つて、般若心経つて知ってます？」

「知っている」

男はそっけなく答え、娘は感心しきつた様子で、「ですよーっ」と返してきた。男はなんとなく小馬鹿にされたような気分になり、娘に話しかけてしまったことを心底後悔した。

しかしもう後戻りはできないとも悟った。

男の傍で、カラスが低く鳴いた。笑っているようでもあった。

そのカラスにつられて、というわけでもないだろうが、娘は瞳を輝かせ、自分の幸運さを満面の笑顔で示している。

「わたし、ほんともうっ、なんてラッキーなんだろう!? 呪文を操る魔法使いに出逢えたなんて、やっぱりこれはもう運命としか言いようがないですよね! だってわたし、シンデレラに出てくるような魔法使いになりたいって思ってるんですから! ビビデバビデとかって魔法の呪文となえるのが夢で。それにああいう、ちよっとこう……中途半端な魔法をかける魔法使いになりたいっていうか!」

「中途半端?」

男は怪訝そうな顔をし、つい訊き返してしまった。

「全部を魔法に頼らせるんじゃないかって、最終的には自分の力で道を切り開いていけるような魔法がいいんです。そういう風な魔法をかける魔法使いになりたいって、ずっとずっと願ってきたんです」

「……………」

「もちろん、箒に乗って空を飛んでみたり魔女っこに変身してみたり魔物を召喚してみたりもしたいですけども!」

「……空を飛ぶのも変身するのも、不可能だ」

「魔物召喚はオツケーなんですっねっ!」

「……………」

男の眉間には深々とした皺が刻まれて、たわむことがない。

どうにも分が悪い。

男は、自分が押され気味で、さらに押し返すのが難しそうだとも察している。

だいたい、扉が開いたこと自体が、異常なのだ。異常事態の発生そのものもが少なく、そのせいで対処に出遅れてしまったのは男の

ミスだ。

男はにがりきって嘆息し、それから背後にいるカラスに何か小声で指示を出した。

カラスは一鳴きするとサツと翼を広げて飛び立ち、またすぐに元の場所に戻ってきた。嘴に、紙をくわえている。男はそれを手に取った。

「私に弟子入りしたいとのことだが」

「はい、そうです！」

「先ほども言ったが、私はヒトが使う言葉を研究し続け、言葉の魔術を用いる」

「はいっ」

娘は元気よく応える。もう弟子入りできたような顔だ。

「弟子入りしたいというからには、言の葉を正確に発音してもらわねばならない」

「は、はいっ」

「……では」

弟子入り志願をしてきた娘に、男は入門試験を行うことにした。

実に簡単な試験だ。

男はカラスがくわえてきた紙を娘に向け、「これを読んでみる」

と言う。言葉の魔術を学ぶ上で欠かせない重要な単語だ。一息で言いきれ、と。

娘は固唾を呑んでから頷き、意気込んで声を発した。

「じゅ、じゅじゅちゅっ」

紙に書かされていた単語は一つ。二文字の漢字、『呪術』。

男は笑いもせず、

「入門は許可できんな」

用意していた言葉を口にした。

もちろん、娘は納得しなかった。それどころかリベンジすべく闘志を燃やしている。

「そのくらい、すんなり言えるようになってみせますから！」

入門の許可は得られなかったが、男のもとへは出入り自由になった。自由にさせたつもりは毛頭なかったが、娘は何食わぬ顔でやってきて平然と居座るようになっていた。それどころか男の身の回りの世話まで焼くようになり、すっかり弟子気分である。

今日も娘はやってきて、意味不明の「呪文」をつつかえながら唱え続けている。

「ナナムギナマゴメナマナマコツ！」

そして有耶無耶のうちに娘の師匠になってしまったらしい魔術師は、娘の淹れた茶を飲みながら本のページを繰り、時折ため息をついては内心で訂正している。

「……ナマタマゴ、だ」

占術

魔法使いになりたい！

(前書き)

「呪術」のその後の小話です

占術 魔法使いになりたい！

「師匠は占いつてやらないんですか？」

押しかけ弟子の娘が、唐突にのたまった。

持参した陶器のマグカップになみなみとカフェオレを注ぎ、ついでに「師匠もコーヒー飲みますか？」と訊く。

弟子たるもの、まずは師匠に御伺いをたててから、自分の分を淹れるのが普通ではないのか。そう頭の隅でちらりと思わないでもなかったが、娘に師匠呼ばわりされている青年は無言のまま、いるともいらぬとも応えなかった。

青年の意を汲んでなのか勝手に憶測してなのか、青年の分のコーヒーも淹れてから、娘は当たり前のように青年の向かい側に腰を下ろした。

魔法使いになりたいからと、無理やり弟子入りしてきた娘は、すっかり我が物顔で魔術師の隠れ家に長時間居座るようになった。自宅から通ってきているから、寝泊まりはしない。女子高校生の弟子は、学校から帰ってすぐ異空間の扉を開け、師匠に会いに来る。娘曰く、部活動みたいなものだから！らしい。

部活動といっても、その活動は非常に地味だ。しかも娘ひとりしか“部員”はおらず、指導者であるはずの青年もほとんど協力をしない。娘は一人で早口言葉を練習したり、本の朗読をしたりしている。気が向くと、師匠が間違った言葉を静かに訂正してくれるから、娘としてはそれでやや満足だった。もうちょっと積極的に協力してくれたり指南してくれたりしてもいいのかなあと、それを要求してはみるのだが、大抵は無視されてしまう。

娘が師事している魔術師の青年は、言葉を操る魔術師であるとい

うのに、極端に口数が少ない。

「一番長く喋って、うるさいとか静かにしろとかですもんねえ。まだ一度も呪文聞かせてもらえてないし。喋らないままだと舌の動きが悪くなっていざって時に困るんじゃないですか？」

「……」

娘はというと、青年の何倍もお喋りであるから、もとは閑寂だった隠れ家も以前とはどことなく様相が変わり、沈黙の帳が降りにくくなっていく。たった一人の娘の存在が、魔術師の静かな日常をいとも容易く変えてしまった。

青年の腰かけている椅子の背もたれの端に止まっているガラスもまた、時折呆れたように「カア」と鳴き声をあげるようになっていく。魔術師の使い魔は、普段は主に似て物静かだ。

「たまには喋る練習、師匠もした方がいいですよ。ほら、一緒にこの早口言葉言いましょうよ。あかまきまきまきまきの！」

「……」

赤巻き紙黄巻き紙だと訂正するのも馬鹿らしく、青年は灰青色の瞳を軽く伏せて嘆息した。

押しかけ弟子は、現れ方がそうであったように、なにを言いだすのか予想もつかない突飛さがある。

いきなり占いはしないのかと問われて、魔術師の青年は、僅かに眉をあげた。

「魔法使いなんだし、占いくらいできるんじゃないんですかって思っつて。手相とか人相とか」

「……」

魔法使いではなく、言の葉を操る“魔術師”だと、初対面の時にも言ったはずだが。そう目で訴えるも、娘は意に介さない。それどころか、

「あ、言葉の魔法使いなんだから、こっくりさんとかやったりする

「んですか？」

などと、的外れなことを平気で言っただけのだから性質が悪い。冗談を言っている顔でもないのがまた青年のため息を誘うのだ。

沈痛な面持ちで、若干わざとらしくげに嘆息してみても、押しかけ弟子にはなんの効果もない。

しかたなしに、青年は尋ねてみることにした。

「いきなり占いとは、なんだ。なにが聞きたい」

今日一番の……いや、ここ数日間が一番の長台詞喋った！と、

大仰に驚いて見せてから、娘は次の句を継いだ。

「いや、あのですね。師匠、恋占いしてくださいよーってことで」

「恋？」

「うつつ」

いきなり娘はテーブルにつつぶした。

「……………なんだ」

青年は眉をしかめ、またしてもしかたなく訊いてやった。どうしたのかと聞いてほしそうなオーラが、娘の背中からありありと浮かびあがっている。

「失恋したんですうつつ」

「……………」

娘はウワアアンと、本当なのか嘘なのか、大袈裟な泣き声をあげた。傍にいた黒カラスは翼をバサリとひろげ、窓辺へ逃げた。娘の黒くて長い髪が、羽ばたきの風で少し乱れてテーブルに広がった。

「失恋したら髪の毛切るのが昔っからの定番だけど、まほーつかい目指してる身としては切れないし！」

娘はむくりと上半身を起した。

嘘泣きではなかったらしく、涙目だ。

「っていつか、今日失恋ホヤホヤだから髪切りに行く時間的余裕もなかったんですけど」

「……………」

娘は髪の毛には魔力があると信じていて、それゆえに伸ばし中ら

しい。

別段、髪が長かろうが短ろうが魔力に影響はないはずだがと、青年はそう思っていたがあえて口にせずにはいた。青年自身、長髪だった。髪に魔力があると思いきや根拠がどうやら青年にもあるらしい。魔力を蓄えるために髪を伸ばしているわけではないのだが、いちいちそれを言うのが面倒で、黙っていた。どうとでも解釈すればいいと、投げやりに思っているのも否めない。

髪のことにはさておきと、娘は早口に語りだす。

「ずーっと片想いしてた先輩なんですよー。で、思いきって告白したけど彼女いるからってすぱっと断ってくれちゃって！ 勿体ぶりもしない先輩かっこいいよ、まあ、やっぱり好きだよー」

それから数分、青年は娘の恋話をうんざりするほど聞かされる羽目となった。

何しろ出逢い編から告白編までの長い話だ。適当な相槌も打たず、ただひたすらに口を噤んで、真摯に耳を傾けているふりをしていた。あっさり玉砕の失恋してしまったので、占いがどうかと言うよりも、単に話を聞いてほしかったのだろう。

「師匠！」

一通り話し終えてから、娘はパンツと両手でテーブルを叩いた。

「可愛い弟子が失恋したんですよ！ なんかこう言うことないんですか！？ たとえば、ええっと……、いい男は他にもいるとか、この先いい相手がなかったら私が責任とってもらってやるとか！」

「……………」

「まあ、師匠に責任とってもらうんなら、ちゃんと魔法使いにしてもらえる的な責任が嬉しいんだけど」

「……………」

「ちよつとくらい気の毒がっても罰はあたりませんよ、師匠！」

「気の毒がらいたいのか」

「……………」

今度は娘の方が口を噤む番だった。むっつりと顔をしかめ、唇を

尖らせた。

青年の声音はいつも通りに低くて静かだ。表情も、森の奥にひっそりと水を湛えている湖のように凪いでいる。

娘は拗ねた顔をぷいっと横向けた。

「気の毒がられたくは……ないけど」

慰めてほしい、というのが本心だ。

失恋して心が弱りきっているのだから、少しくらい甘えたっていいじゃないか。いつも甘えきっている気がしなくてもないけれど。

目と頬を赤くし、ふくれっ面でそっぽを向く弟子に、青年は不意に手を伸ばした。

「占術も様々に種類がある」

言ってから、青年はつまむようにして弟子の丸い顎を掴んだ。そして自分の方に、卵型をした弟子の顔を向かせ、灰青色のまなざしを注いだ。

「……っ!？」

青年の唐突な行動に娘はぎょっと驚き、眼前にある端正な面貌を凝視した。

「呪術と違い、占術はさほど得意ではないが」

「……どこがどう違うんですか？」

「……………」

相変わらず「呪術」の発音が苦手らしい弟子に、「呪術」と「占術」、二つの違いを詳細に語ってやる気は起きず、青年は無視して次の行為に移った。

弟子の顔を引き寄せ、青年は額と額を合わせた。じっと弟子の瞳を見据える。娘もまた目を閉じず、青年の灰青色の双眸に吸い込まれそうになりながらも、眉間に力を入れて見つめ返していた。

「未来視の術だ。今宵、知りたい未来を夢で視るだろう」

その言葉そのものが、術だった。

青年の声がいつもと微妙に違うことに、魔力を身の内に宿してい

る娘は気がついた。心の中に浸透していく、さざ波のようにやわらかな声音だった。それでいて、重量感がある。

言の葉を用いた「占術」だ。

術を施し終えてからすぐに、青年は指を離した。弟子はぼつとしたままだ。術のせいというよりも、師匠の思いがけない行為に驚きすぎたようだ。ぼつ然として目を丸くしている。涙は引つ込んだが、頬の赤みは消えない。それどころかさらに熱っぽくなり、熟れた林檎のようになっていた。

師匠の顔が離れても、娘は硬直したようにその場に固まり、ぽかんと間の抜けた顔を晒している。

そして数秒後。

娘は脱力しきつたため息をつき、感慨深げに呟いた。

「師匠つて……なにげにスケコマシだったんですね……」

娘の言葉に青年は眉間の皺を一層深く刻んだ。

「破門にされたいのならいつでも言え」

はたして、声を大にして「破門とか横暴っ！」と反論した娘は気づいたろうか。

破門の一言で、言の葉を操る魔術師の正式な弟子になったということに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1271z/>

A collection of short stories

2011年12月10日10時56分発行